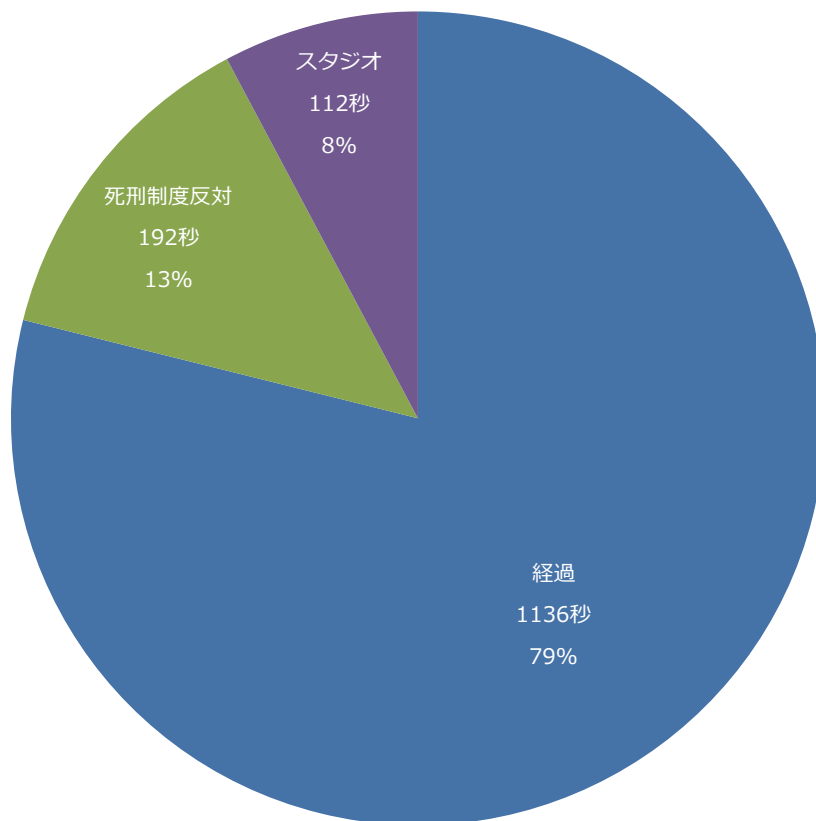


TV 報道検証【報道特集】 報告書

テレビ局： TBS	番組名：報道特集	放送日： 2018 年 7 月 28 日
<p>出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、日比麻音子 ゲスト：久保田朝美(気象予報士)、福島隆史(TBS 解説委員：災害担当)</p>		
<p>検証テーマ： 【特集】 オウム死刑執行と死刑制度</p>		
<p>報道トピック一覧</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 台風 12 号、東海地方に上陸へ 台風の影響で鉄道ストップ、交通に乱れ 航空各社も 200 便以上欠航 スタジオで久保田朝美の解説 ・ 豪雨被災地、台風対策急ぐ ・ 台風 12 号が接近：東京江戸川区、神奈川県箱根町から中継 ・ 【特集】 オウム死刑執行と死刑制度 ・ 【特集】 台風 12 号 ・ スポーツ報道 <p>※今日は予定を変更しての放送だったとのことが番組の最終盤で膳場キャスターから伝えられた。</p>		
<p>放送法第 4 条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オープニング：結論→特に問題なし 番組冒頭では金平キャスターが「これまでにない豪雨、これまでとは違う進路の台風と、このところの異常気象で大きな被害や影響が出ています。これまでの経験が通用しない恐れがあります。くれぐれも気象情報に注意して、早めの準備に心がけてください。続いても台風関係のニュースです。」とコメントしていた。 このコメントに当てられた時間は 16 秒で、放送法第四条の観点からは特に問題は見られなかった。 ・ 【特集】 オウム死刑執行と死刑制度：結論→問題あり オウム事件での死刑囚について死刑囚 13 人全員が死刑執行されたということと、とそれに関連して死刑制度の是非が取り上げられていた。このトピックについて当てられた時間は 1440 秒で、トピック中ではオウム事件について死刑執行がされたことおよび事件関係者のコメントを紹介するシーンなどからなる経緯説明の場面、死刑制度に対する反対意見が紹介される場面、VTR を承けてのスタジオでの議論がなされる場面に大別された。なお、死刑制度を前提として今回の死刑執行について否定的ではない形で受け止めていたコメントは取り上げられていたが、死刑制度への反対及び廃止論に対する反論や死刑制度自体の必要性などを主張するコメントを取り上げるシーンはなかった。 それぞれの場面の比率及び時間配分は以下の通りであった。 		



概要の説明の場面ではオウム事件についてや拘置所の様子などが取り上げられていた。また、事件での遺族のコメントとして、松本サリン事件で息子を亡くした伊藤洋子さんの「月日がたてば悲しみは癒えるとか何かいいですが、私たちねあの遺族にすればそういうことはね・・・死刑執行されても許すことはできないです」や、地下鉄サリン事件で夫を亡くした高橋シズエさんの「後遺症を抱えている人もまだいるわけですし、あの、遺族でもあまり触れたくないっていうようなそういう状況もあったりするので、執行はされても被害者のその被害はまだ続いているという」、松本サリン事件で妻を亡くした河野義行さんの「事件の真相というのはやはりあのその人その者に聞かなければ、心の内はわからないと思うんですね。まあそういう意味ではですね、本当の真実っちゃうのは分からなくなったと思うんです。えー二度と起こらないようにするための方策は終わっているのかどうか、えーその辺をぜひ、明らかにしてもらいたい」というコメントが取り上げられていた。

また、事件関係者の中村裕二弁護士コメントが以下に朱記したシーンが取り上げられていた。

ナレ「殺害された坂本堤弁護士と同期でオウム事件の被害者に寄り添ってきた中村裕二弁護士に聞いた。」

日下部「まあ死刑囚全員の刑が執行されたと、どう受け止めました？」

中村弁護士「被害者遺族の皆さんのご意見としてはやはりあのこれで一つの区切りがついたと、亡くなった家族の皆さんに対して報告できるというお気持ちをですね、私の方に伝えてくれる方が多いですね。私自身もあの坂本事件の関係では、あの当事者に近い立場のだったものですから、あの坂本さんにしっかりと報告ができるかなという風にあの思っておりますし、そういう意味ではまあ少しほっとした気持ちもあります。」

ナレ「そのうえで中村弁護士は、事件の解明という点から複雑な思いをのぞかせる。」中村弁護士「なぜあれほど高学歴でおそらく人一倍優しい子供たちがあの麻原元死刑囚のような人のですね言葉に巧みに翻弄されて心を奪

われてしまうとその部分についてはあの私たちが死刑囚らに会ってですね話を聞きたかったんです。今後こういう事件が2度と起こらないようにするためにも、彼らの言葉は悪いかもしれませんが、貴重な資料としてもう少し死刑の執行は待ってほしかったなど」

さらに、ジャーナリストの江川紹子さんのコメントについても以下に朱記したシーンが取り上げられていた。ナレ「一方長くオウム真理教について取材し、事件の裁判を傍聴してきたジャーナリストの江川紹子さんは、裁判記録をもっと分析し活用すべきだと主張する。」

江川氏「やっぱりあの裁判で出されたことっていうのはもっと大事にしなけりゃいけないと思いますよ。あの真相は闇の中とかですね、何もわかってませんねみたいな感じのことを無責任におっしゃる方が多すぎます。この弟子12人というのは程度の差はあれですね、裁判などでも自分の体験を語ってきた人たちです。いわば、まあカルトによる未曾有の連続テロ事件のですね、まあ内情もよく知ってる。そしてその動機で行われたかも知ってる。そして自分たちがどうやってあそこに入っていき、犯罪者になってきたのかも体験していると、あの日本はあの未曾有の事件をですね刑事事件として処理しただけでもっと大きな視点で、あるいは多角的な角度からそれを分析するというをしなかったと、彼らが語った内容っていうのは今もうほとんど裁判記録にしかないと思うんですね。それと一部の本と手記ですね。だからそういう裁判記録っていうのはとにかくその適正な手続きによって集められた証拠と、公開の法廷で語られた記録です。それをやっぱり大事にしてあの一それを資料にして、えーまあ語り継いでいくことも必要でしょうし、あるいはさらなる分析をしようということも必要だと思います。」

ナレ「この凶悪事件から見いだせる教訓とは何か。」

江川氏「特にオウムに入っていた人たちっていうのは、結構自分の生きがいとかですねやりたいこと探し、あるいは居場所探してみたいな感じで入っていた人もいます。たしかに、あの一バブルの時代でですね、あのそれに反発するような人が精神世界の方に走っていったというそういう一つの何か社会の風潮もみたいのものもありますけれども、でもあんまり時代背景を強調しすぎるのも違うと思うんですね。そういうなんというかなその自分の居場所がわからない、あるいは自分のほんとはやりたいことがわからない。自分の生きている意味ってなんなんだろうって、これはあの一やっぱり普遍的なテーマだと思うんですね。特に若い人たちなんかの。やっぱりあのオウムっていう非常に極端な事例からなんかもっと学んだほうがよかったんじゃないかなっていうのはあの一私の考えです。」

死刑制度反対論については以下に朱記したシーンが取り上げられていた。

金平「えーオウム死刑囚の大量処刑に抗議する人たちの集会が今開かれています。会場にいっぱいの方がいます。」
集会参加者「13名の死刑確定者は生きて罪を償う機会を奪われ、またオウム事件の真相を明らかにすることもできなくなりました。内閣および法務大臣は死刑執行が何ら問題の解決になっていないことを肝に銘じるべきです。」

ナレ「昨日の夜、オウム事件の一連の裁判に関わった弁護士らが都内で集会を開いた。端本悟死刑囚の弁護人を務めた河井匡秀弁護士は、河井弁護士「再審請求をしようよということを何度も彼には言ったんですけども、最後まで彼は再審請求をすることを断りました。それはどうしてなのということを何度も何度もこう彼と話し合いをしたんですけども、彼が言うのはこういうことですね。『だから本当に申し訳なかったと思う。』ともうあの『自分がやったことはとてもじゃないけど許されることではない』と

ナレ「一審で松本智津夫元死刑囚の主任弁護人を務めた安田好弘弁護士はこう語る。」

安田弁護士「死刑のレベルというんでしょうかね、ステージ、それを一気に引き上げてしまったと7名の人を執行したわけですが一緒に。そうすると、これから続く法務大臣は5名いやちょっと多いじゃないか、いや3名そん

なことはできませんよ。この前7名の人を殺ったじゃないですかという話になってくるわけです。こういう風な死刑に関する状況がこれからは続いていくと」

ナレ「集会では死刑制度の在り方に話が及んだ。」

安田弁護士「死刑執行を一つでも少しでも減らしていくと、いうことを考えていく必要があると思うんです。で私は前から申し上げたいんですけども終身刑を今の状況で導入しようと、そうすることで死刑が一つでも減るんじゃないかと」

作家・映画監督 森達也さん「議論したいです。あの一死刑制度の是か非か、いろんな見方がいろんな意見がある当たり前です。でも、この国では議論ができていない。議論するだけの材料がない。」

金平「今度のことで何か変わりましたか？」

安田弁護士「変わるでしょうね。それはもう大量殺りくというね、処刑ですからできるだけ今までは、あの一慎重にやる死刑はできるだけ控えようというのが、今のずーと長くいた流れだったんですね。死刑はやむを得ずやらざるを得ない。しかし今回は違いますね。これは国家をしてやらなきゃならないんだと積極的な死刑はやるべきものだ。」

金平「今後、この日本という国の死刑をめぐる論議というのはどういう方向に行くと思いますか？」

安田弁護士「もう当たり前のこと、それをむしろ死刑がおかしいということ自体が、異端者だということになっていくんでしょうね。」

また、スタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り返されられた。

膳場「このひと月でオウムの死刑囚13人全員の刑が執行されましたけれども、金平さんどう受け止めてますか？」

金平「僕はね、あの時代の本質的な変化を感じますね。あの一長年の自分の取材経験から申し上げるんですけども、これまでの戦後の司法行政の流れというのは、まあ紆余曲折あるんですけども、死刑についてはなるべくこう抑制的に、執行を減らすっていうか、やむを得ず殺るんだっていうようなそういう方向があったんですけども、ここにきて1か月に13人の死刑執行という形でまあ死刑もためらわずに執行していくんだっていうまあその方向転換が起こったっていう風にそういう見方がありますね。まあこれは明らかに世界の潮流とは、逆向きですね。でEU欧州共同体の代表部なんですけれども、実は7月6日の7名の死刑執行の直後に日本政府に対して申し入れをしているんですけども、テロ行為は断じて非難するが、事件の重大性に関わらず、執行には明白に反対すると。死刑制度は犯罪抑止力はないという風に言ってですね。死刑の執行停止を申し入れているんですね。」

膳場「どうなんでしょうか。今回のことであの今後死刑をめぐる論議に影響って出てくるんでしょうかね。」

金平「もともと、国家は人の命を奪う権利があるのかというのは死刑制度をめぐる議論の根本的なところとは別にしてですね、VTRの中にもあったように被害者遺族の中からも死刑執行ですべてが解決されることはないという声が多く聞かれました。とりわけ河野義行さんですね。本当の真実というのはわからなくなったという言葉が非常に私は重いと思いますね。あの今回の大量の死刑執行で死刑制度をめぐる議論自体が仮に何を言っても無駄だっていう風な空気も日本の中に広がるとしたら民主主義国家としては決して健全なことではないという風に思います。」

死刑制度をめぐるのは今回は反対の見解ばかりが取り上げられていたが、死刑廃止後に終身刑(仮釈放の可能性のない無期刑)を導入するのかもしれないのかであるとか、死刑制度存続論というのは取り上げられていなかった。死刑制度存続論というのも一定の支持はあるだろうし、終身刑導入の是非というのは死刑制度廃止論と関連する重大な論点であったが、そういった点が触れられずに、死刑制度反対論の紹介に著しく偏っていた点は放送法第四条一項二号「政治的に公平であること」、同項四号「意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること」に照らして非常に問題があったと言える。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨
特になし

検証者所感

・ オープニングおよび番組構成について

今回はオープニングが争点のある問題について視聴者に対して予断を与えたり、一定の結論への誘導するようなものではなかったという点は評価できた。